縁組による讃岐山脈南麓町村の人口移動*

—縁組による人口移動の地域的研究 第5報—

合 田 榮 作**

序 本篇は讃岐山脈南麓の徳島縣の6町10村へ1949年中に届出た婚姻届2342, 離婚届152, 合計2494人を資料としてその移動を考察したもので, 1949年のを用いたのは, 香川縣の平野村, 島嶼村, 都市殊に本誌に先に述べた讃岐山脈北麓諸村^①等との比較に便な爲である. 資料蒐集にあたり種々御高配をいたゞいた徳島, 川島, 脇町各法務局並に, 徳島大學の岸本教授はじめ學生有志に心から感謝する次第である.

1. 地域概観 讃岐山脈北麓の香川縣の諸村と對稱地域をなすが, 香川縣側は文化的に恵まれず人口も少ない地域であるのに對して, ここは古くから今日に至るまで徳島縣の主要居住地域をなす吉野川流域の核心地域を構成している. 地壘南麓の斷層崖を中心として, 北は分水嶺に, 南は吉野川沖積平野に及び, 壯年期的に開析された谷は南に開き, 特に中央部山麓には見事な複合扇狀地や河岸段丘が連續しており, 龍王山1057米を最高として東西に低くなるが非對稱的で, 西端の佐馬地村附近は山が高く河谷が狭く南麓斜面の全部を占めるが, 東方は河谷が廣くなると共に河岸を遠のき, 東端の北灘村は山脈の北麓に位置し地形區的には讃岐側となつてゐる.

氣候も東部程瀬戸内式であり, 西部程氣溫の年較差や雨量は大であつて東西が非對稱的であるが, 風は北や西が一般的である.

一般に畑作卓越地域であるが土地利用も又東西が非對稱的である. 東部は水田率が高く, 南瓜, 西瓜, さとうきび, なし, 石材, 粘土をはじめ藍作地域が變化した桑園も多いのに, 西部は水田率低く, 葉煙草, 借耕牛(貸牛)をはじめ, 木材, 薪炭等の生産に特色をもつ. 工業も交通も東部によく發達し集落も人口も東部に多い. 交通路は東西南北によく開通し, 殊に讃岐との間には鐵道のほかに峠によるバスが開通して人口移動も多い.

2. 移動者の構成 移動者を集計すると第1表となる. 即ち離村者は1040人42%で最も多く, 入村者は927人37%, 自村者は526人21%となり, 北麓諸村と類似するが入村者がやゝ少なく自村者がやゝ多い. 離婚者

** 香川大學學藝學部地理學研究室

地理學評論26卷9號(1953年9月)

1952年10月 日本地理學會大會にて發表

第1表 移動者の構成

	男	女	計
總 計	306(28)	2,187(123)	2,493(151)
離 村 者	134(10)	906(52)	1,040(62)
{ 縣 内	96(8)	567(34)	663(42)
{ 縣 外	38(2)	339(18)	377(20)
入 村 者	98(11)	829(42)	927(53)
{ 縣 内	80(4)	561(17)	641(21)
{ 縣 外	18(7)	268(25)	286(32)
自 村 者	74(7)	452(29)	526(36)
縣 内 者	176(12)	1,128(51)	1,304(63)
縣 外 者	56(9)	607(43)	663(52)

備考 1. () 内はその中の離婚者数、以下同じ 2. この他に、移動種、性別別共に不明の離婚者1人あり、総計は2,494(152)人となる。

152人は6.1%で少ないが、其總數中で占める%からは離村者6.0%、入村者5.7%、自村者6.8%で、自村者が多く北麓村と同じである。女子が87.8%で大部分を占め、その總數は離村者、入村者、自村者の順であるが、その各の中の%では入村者(90%)、離村者(87%)、自村者(86%)の順となる。男子も總數では女子と同じ順であるが上のような%では女子の逆となる。移動者2,494人は人口(1950年10月1日、以下同じ)1000人當24.4人で北麓村の27.1人よりは少ない。

3. 移動の地域的考察通婚圏 (a) 自町村内移動 人口1000人當5.1人で、その分布は第1圖となり、廣い町村や西部の町村に多い傾向がある。このことは移動總數中自町村内移動者の占める%の分布からも言える。之は廣い村や中央部の村に多かつた北諸村と同じく移動範圍の廣大さや交通

の不使さから當然のことである。やはり女子が主體をなすが、女子移動者中女子自町村内移動者は 20.6%であるのに對して、男子移動者中男子自町村内移動者は 24.4%となり、男子は絶對數は少いがこの%は女子よりも大である。

(b) 縣内移動 自町村内、縣内、縣外別では 52.3%で最も多く、又女子が主體をなす。入村者よりも離村者が多く、又全離村者中に於ても全入村者中に於ても主要部分をなし、男子離村者中男子縣内離村者の占める%は、女子離村者中女子縣内入村者の占める%よりは多く、又男子入村者中男子縣内入村者の占める%は、女子入村者中女子縣内入村者の占める%よりは多く、之等は本籍のみによる移動者を除いても變りなく、自町村内移動と同じく同性中では男子は女子よりは近距離移動者が多くなる。之には諸種の要因があろうが、縁組移動の特色と言えよう。縣内への離村者は 16ヶ町村相互のものを除けば 459 人で、その行先地は(圖略)中部以東の近隣町村や徳島市等に多く、劍山を中心とした中央部山地や溫暖な南部地方には見られないが、吉野川を中心としてみると、東部では徳島市以外は北牟の沖積平野に多いのに對して西部程南岸地域となりやゝ遠くに及ぶ。之を更に行先地市町村人口 1000 人當人數としみると(圖を省略編集)、近距離程多く遠距離程少ないが、その距離的制約による減少は L 字型で、1 人の線附近が急變點で、西部に遠く東部に近いが距離は約 5 軒で、全出婚圏はほぼ 20 軒以内となり都市も特に多くはならない。

縣内からの入村者は 16ヶ町村相互間のものを除けば 437 人で、その前住地は離村者の行先地と類似し(圖略)、やはり近距離町村特に吉野川沖積平野中央部に多いが、中央の山地部にあることは前者と異なる。人口 1000 人當人數も(圖略)離村者に類似して分布して近距離に決定せられ、距離的制約による減少も L 字型で急變點は西部に遠く東部に近いが距離的には約 5 軒である。たゞ全入婚圏はやゝ廣く殊に西部に廣いことは異なる點である。

かくて縣内との人口交流は流出が流入よりは多いが、その移動地域は却つて流入の方が廣い點に特色がある、離村者と入村者との合計の人口 1000 人當人數の分布を縣内通婚圏とすると(第 2 圖)、距離的制約をうけて近距離地域即ち縣の北半部を占めるが、その形は近距離程移動者が多く、距離 5—15 軒からは移動者が 1 人以下となり、ここからは L 字型に急減する圈狀構造をなす。吉野川を中心とせば、東部はほとんど北岸に決定せられるが、西部は南岸の廣い山間村に亘り、谷形とは關係なく、むしろ之とは逆な東に狭く西に廣い非對稱な形態をなす地域となる。

第2圖 縣内通婚圖
(縣内移動数/人口×1000)

(c) 縣外移動

全體の26.6%であり縣内移動の51%で非常に少ないが、やはり女子が主體であり入村者よりは離村者が多い。然し同性移動者中に占める%は男子18.3、女子27.8で、縣内や自町村内のことは逆に女子が著しく多い。之は女子移動は近距離に多いと

いう一般説とは異なり縁組移動の特色と言えよう。

離村者377人の行先地を、臺灣、樺太を除いて都道府縣別にみれば(圖略)、香川縣への113人を筆頭に、大阪89人、兵庫35人、愛媛23人、福岡21人、岡山14人等隣接地や阪神、瀬戸内等に多く、滋賀以東、山陰、福岡を除いた九州等に少なく、巨大都市東京都と新開地北海道とは例外的に多い。然し34%を占める127人は本籍のみによる移動者(以後本籍移動者と稱す)で、之は北海道は8人中7人、東京は7人中5人、福岡は21人中15人というように殊に遠方に多い。今之等を除けば、香川の102人、大阪の55人、兵庫の22人、愛媛の18人、岡山の10人、廣島の7人、福岡の6人、高知の5人等が多く、例外なく近距離府縣となる。又46%をなす172人は都市への離村者で、之は大阪の80人、兵庫の29人、香川の11人、福岡の9人、東京の7人、廣島・岡山の5人等が多い方である。

人口百萬人當人數は全國で4.56人で、都道府縣別分布では(圖略)、香川の120人を筆頭に、大阪の22.9人、愛媛の15.1人、兵庫の10.6人、高知の9.15人、岡山の8.43人、福岡の5.95人等に多く、本籍移動者を除くと全國は3.03人で、香川の108人、大阪の12.3人をはじめ、愛媛、兵庫、岡山、高知の順となる。之等から出婚圏は隣接縣と阪神地方とを核心地域とした近接地域や都市地域が主で、本籍移動者をも加えれば北海道や東京都が例外的に加わると言えよう。之等を通じて移動方向は山脈を超えた對稱地域香川縣を第一とした北方であることは、北麓諸村が徳島縣を

主とするのと對比して興味がある。

入村者 286 人の前住地を樺太、滿洲、朝鮮を除いて都道府縣別にみれば（圖略）、大阪の 69 人、香川の 49 人、兵庫の 39 人、福岡の 17 人、京都の 11 人、愛媛、山口、北海道の 10 人、岡山の 9 人、高知の 8 人というように、阪神、四國、山陽、福岡等に多く、以上の三府縣を除いた近畿及びそれ以東、山陰、福岡を除いた九州等に少なく、北海道、鹿児島、東京は例外的に多く、離村者の行先地と類似する。之にも本籍移動者が 159 人 55 % もあり、北海道の 10 人中 8 人をはじめ遠い所に多い傾向があるが、之を除くと香川の 37 人、大阪の 30 人、兵庫の 15 人、福岡の 6 人、岡山の 5 人等が多くなる。又市からの入村者は 146 人 51 % で、大阪の 60 人 87 %、兵庫の 33 人 85 %、山口の 8 人 80 %、京都の 7 人 64 %、廣島の 5 人 71 %、東京の 5 人 100 %、北海道の 5 人 50 % 等に多い。

人口百萬人當人數は全國で 3.44 人で、都道府縣別分布は（圖略）、香川の 51.8 人を最多として、大阪の 17.8 人、兵庫の 11.8 人、高知の 9.15 人、愛媛の 6.58 人、山口の 6.5 人、京都の 6.0 人、岡山の 5.42 人、佐賀の 5.3 人等に多くて、やはり近接縣と阪神地方を核心地域とし、本籍移動者を除外すれば 127 人で全國では 1.53 人、香川の 39.2 人を筆頭に、大阪、高知、兵庫等に多く又離村者の場合と類似する。之等から入婚圏は出婚圏と類似

第 3 圖 離村者と入村者との差の分布

（第 3 圖）、不思議に規則性をもつて近くは出婚圏、遠くは入婚圏となる。之の解釋は困難であるが、1649 年頃の國內人口移動は國の中央部への集中傾向がその逆流よりは既に著しく強くなつて來ていた爲ではあるまいか。

していると言えよう。然し縣外は離村者が入村者よりは非常に多い爲出婚圏としての色彩が強い。このことは離婚者と本籍移動者とを除くと更に明瞭で、この二者を除いた離村者數と入村者數との差の都道府縣別分布は

第4圖 県外通婚圏
(県外移動数/人口×100萬)

離村者と入村者との合計は、香川の162人を第として、大阪の158人、兵庫の74人、福岡の38人、愛媛の33人、岡山の23人、京都と北海道の18人、高知と広島16人、山口の15人等に多く、四國と京阪嵯を核心地域として瀬戸内、北九州

が主となり、遠い北海道や東京都もやゝ多い。之の人口百萬人當人數は全國で8.0人で、第4圖の如く香川の171人、大阪の40.8人、兵庫の22.3人、愛媛の21.7人、高知の18.8人、岡山の13.8人等に多い。本籍移動者を除けば、香川の139人をはじめ、大阪、兵庫、愛媛、岡山等に多く、人口百萬人當人數は全國で4.54人となり、香川の147人をはじめ、大阪、愛媛、兵庫、高知、岡山等に多い。

之等から通婚圏は四國、阪神、岡山地方を核心として東は京都府、西は北九州まで、殊に香川縣が主で、北麓諸村と同じく近距離地域に決定せられるが、距離の制約は同一方向に於てあり、北方や北東方向に移動量の多い圈狀構造をなす地域であると言える。

(d) 三者の相互關係 移動絶対數は縣内、縣外、自町村内の順であるが、(縣内には16ヵ町村相互間の移動數408人を含んでいるが、之を除いても一番多い)、人口比率では、自町村内は人當5.14人であり(16ヵ町村相互間のを加えると千人當9.13人)、縣内移動は千人當1.48人であり(縣人口から16ヵ町村人口を除いた人口に付總數から16ヵ町村間の移動を除いた數とせば1.15人)、縣外は全國人口から縣人口を除いた人口に付朝鮮等との5人を除いた658人であるから百萬人當7.99人となり、自町村内、縣内、縣外の順となる。かくて近い自町村内が最主要通婚圏をなし遠い縣外に及ぶと言えよう。このことは本籍移動は遠い縣外に一番多く、縣内、自町村内の順であるから、縁組による直接の移動のみでは更にこの傾向が

強いと言ひ得よう。

4. 移動者の年齢 最年少者は松坂村からの離村男子の15歳。最年長者は御所村の村内女子の76歳(1897年5月3日婚姻, 1949年5月届出, 1949年7月10日離婚, 1949年7月届出)であり, 最も多いのは22歳で, 23歳, 21歳, 24歳, 20歳が之に次ぐ。年齢配布は第5圖の如くで, ピーク

第5圖 年齢配分圖

クは北麓村より一年若い, 之を境として若年之は急減し, 年長えも急減するが28歳以後は減少が緩慢で, 40歳頃からは非常に少なくなり一進一退しつつ断続していることは北麓諸村と類似している。女子は大體以上と類似するが, 男子は北麓諸村と同じく女子よりは約

3歳長じ且年齢別變化も少ない。然しピークは又北麓諸村よりは1年若く15歳である。

離村者と入村者とは23歳をピークとするが, 離村者は24歳も多く, 入村者は22歳, 21歳も多くやゝ若い傾向がある。自村者は22歳が明瞭なピークをなすと共に, 21歳, 20歳も多く明らかに兩者よりは若い。男子のみでも同じ傾向がある。之は都市地域よりは農村地域の婚姻年齢が若いことを示すものと思われる。村別では平野の多い東部地域に比して山地の多い西部地域には16, 17歳等の若年のものが多く, 農村地域に於ても平野部よりは山間部の方が婚姻はより早いことを物語っている。

5. 移動の時期 移動年で先づ驚ろくことは1949年のものから1897年の古いものまで(御所村の女子, 初婚)53年間にも亘ることで, 年次配布は届出前年の1,042人(42%)が最も多く, 届出年の916人(37%), 届出前々年の260人(10.4%)等が之に次ぎ, この3年間て89%を占め, これ以前のは急減し, 1945年頃を急變點としてL字型に分布し, 北麓諸村と非常に類似する。男子は306人中届出年の130人(42.5%)が最も多く, 1948, 1947, 1946年が之に次ぎ, 之以前は非常に少なく届出が早い, 女子は總計と同じである。離婚者は届出年の92人(60.5%), その前年が35人(22%)で其他は少なく, 届出が一層早いことは又北麓諸村と同じである。再婚者のみでも總計と同じ傾向がある。町村別では松坂村, 松島町, 御所村のみが届出年に一番多く, 他はその前年に多く, 他はその前年に多

第6圖 移動月配分圖

く、總計の少ない町村に早い傾向がある。

移動の月別配布は、2月の401人16%が最も多く、次は4, 1, 3, 12, 5月であり、最も少ないのは9月の51人2%で、7, 6, 8月等之につぐ。そして第6圖の如く、2, 4, 10月の3つのピークと、3, 6—9, 11月の3つの谷が明瞭で、12月から5月までの冬から春に多く、6月から11月までの夏から秋に少ない。之は婚姻が氣候と密接な関係をもっているほかに、年末年始や農閑期農繁期とも関係が深いことを示していることは、年度末の3月や農繁期の6月や11月に少ないこと、農繁期前の5月や10月に多いことからひも理解せられる。之等の傾向は島嶼村や北麓村と同じである。女子は勿論数の少ない男子も類似しており、離村者、入村者、自町村者別ひも同じ型をもっている、ただ離婚者は1月から月順に12, 16, 12, 18, 17, 6, 10, 23, 7, 13, 6, 12人と變化し8月に最も多く6月に最も少なく、北麓諸村のように夏に多いとは言えぬが變化が複雑で規則性がない。町村別變化も規則性を發見することは困難である。

要 約 (1) 離村者は入村者よりは多く、自町村内移動は最も少ない。(2) 女子が主體である。(3) 自村村内移動は廣い町村や西部の山間村に多い傾向がある。(4) 縣内移動は縣外移動よりも著しく多い上に、離村が入村よりも多く、出婚圏と入婚圏とは類似するが前者は東部に、後者は西部に廣く、通婚圏は近距離地域で、各形とは關係なく西部に廣い。(5) 縣外移動が入村より著しく多いが、通婚圏は近距離地域と都市地域とで、本籍移動者を除けば、近くは出婚圏としての、遠くは入婚圏としての色彩が強く、移動方向は北や北東で、殊に北へがその逆流よりは著しく強い。(6) 人口比率からは自町村内、縣内、縣外の順に多い、(7) 男子は近距離移動が多い。(8) 移動年齢は22才をピークとして巾が廣いが、男子はピークが少しおくれ且年齢別變化が少なく、町村別では西部に若い傾向がある。(9) 移動年も巾が廣いが1年前のものがピークで5年前のものは少なく、男子や離婚者や小さい町村は届出が早く古いものは少ない。移動月は3つのピークと3つの谷とをもつて冬から春に多く、夏から秋に少ないが、離婚のみでは、又町村別では餘り變化がない。

本研究は1952年度文部省科学研究費による四國山間村の縁組による人口移動の研究の一部であることを特記し謹んで謝意を表する次第である。

(1952年11月16日受理)

註 (1) 拙稿：縁組による讃岐山麓村の人口移動。地理評。25 pp. 392—400.

MIGRATION CAUSED BY MARRIAGE IN COMMONITIES
ON THE SOUTHERN SIDE OF THE SANUKI RANGE
IN TOKUSHIMA PREFECTURE

Eisaku GODA

In this essay the author presents certain characteristics of migrations caused by marriage in 6 towns and 10 villages located on the southern side of the Sanuki Range in Tokushima Prefecture in 1949. These characteristics are:

- (1) Emigrants were more numerous than immigrants while movements within the village were the lowest in number.
- (2) Women constitute the chief factor in migrations.
- (3) Migrations within the village were more often seen in wider villages and in those lying in the western mountains.
- (4) Migrations within the native prefecture were far more numerous than migrations to and from other prefectures. Migrations most often took place within a radius of about 5 km around the village. "Shukkonken," the sphere into which the emigrants move after marriage, was generally identified with "Nyukonken," the sphere in which the emigrants due to marriage originate, however, the range of the former group was more extensive in the east while that of the latter was wider in the west. In summary, "Tsukonken," the sphere of intermarriage, consisted of proximate districts and its area was somewhat greater in the west.
- (5) Concerning intermigration with other prefectures, emigrants were more numerous than immigrants; "Idoken," the sphere of intermigration, was formed by neighbouring prefectures and cities. However, if migrations in name or domicile only are disregarded, near by prefectures formed the "Shukkonken" and remote prefectures "Nyukonken." In most cases, the direction of migration tend northward.
- (6) In terms of the percentage of the population involved, migration took place most frequently in native villages, next in the native prefecture, and the least in other prefectures.
- (7) Men migrate within a smaller sphere than did Women.
- (8) The age of the migrants varied widely; 22 years occurred most frequently, but, in the case of men, it was at a slightly older age with less variation by age. In those villages in the western section, it appeared that younger persons were more numerous than older ones.

(9) The registered dates of migration ranged widely with a peak in 1948 (one year before) and only few cases going back over 5 years. In the case of men, divorced persons, and those in small villages, it is rather rare to find postponements in registering migration. With respect to the months of migration, statistical curves show 3 peaks and 3 depressions; the migrations took place mainly in winter and spring and were most infrequent in summer and autumn with the exception of those migrations caused by divorce.